

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 森鷗外『山椒大夫』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 40 回のツイキャス読書会の課題図書は、森鷗外先生の『山椒大夫』です。

地味な作品ですが、鷗外の文章の表現力が素晴らしいです。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

[朗読はこちら](#)

## 『これが本当のタダより怖い物はない』

知らない人に借りを作ってしまうと、いつの間にか相手には逆らえない弱い立場になっており、気が付いたら、相手の思うツボで、お金や身内の人も失っていたという悪い冗談みたいな話だと思いました。

つい、さっきまで母親と当たり前と一緒に過ごせていたのが、嘘のように引き裂かれるのが残酷です。

ほとんどの人が親と当たり前にごさせている今の世の中ですが、昔では当たり前じゃないんだなと、この山椒大夫を読んで強く感じました。

途中の額に焼き印を入れられるシーンが印象に残ったのですが、遠藤周作さんの沈黙の後に過去の日本の拷問を調べたら、額に十文字の焼き印をするのは実際にあったようで、消すことも出来ないから、夢オチ(お地蔵様効果)で良かったなと思いました。

山岡大夫は、連れが男か女子か確認している段階でかなり胡散臭さが満載ですが、もし最初に出会う塩汲女もいい人を演じていたらと考えると、もはや誰も信じられないし、現代の振り込め詐欺のように巧妙な罠に引っ掛かってしまうのも仕方がないと思いました。

しかし、この旅の4人で注目すべきは、やはり年長者であり高貴の身分の服を着た姥竹さん(40歳くらい)の表情をよく見て、上手く母親とアイコンタクトなど出来ていれば、山岡大夫なんかには騙されなかったのではないかと思います。

僕は、てっきり『奥様ごめん下さいまし』と、舟から飛び出した姥竹が実は伏線になっていて、忘れたころに登場し、姉・弟の危機的状況からたくましく救ってくれるはず！と期待していましたが、亡くなりになってしまったようで個人的には残念でした。

さらには、母と子供達が別々に連れ去られた後、安寿が厨子王に、お前は町に行けと促しますが、一緒に逃げずに死を選択していたり、父親は既に亡くなっていたり、正道(厨子王)が偶然に再会した母親も恐らく酷い目に会いボロボロの状態でしたが、自分のことを歌っている歌で気が付けて母親と抱き合って終わるのは、作品として感動的で綺麗な終わり方だと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 「山椒大夫」感想文

読んでみて随分宗教的な傾向が強いお話だと思いました。私は、これを森鷗外が書いたことを少し不思議に思いました。鷗外は熱心な仏教信者だったのでしょうか？

この話には悪人と善人が出てきますが、ほとんどは善人で困った時に助けてくれました。また子供を助けると言われる地蔵菩薩の守り本尊も不思議な力を発揮して助けてくれました。安寿や曇猛律師は地蔵菩薩のようでした。

悪人もひどい処罰をされることもなく、すべての人間に対して愛を感じるお話でした。悪人でも救われるという浄土真宗の教えのようでした。

私は、宗教は別としても、辛い世の中でも、絶望してはいけない、希望をもっていれば、良いことが起きるといふ筋立てが気に入りました、

世の中には善人と悪人がいるでしょう。私は悪人にならないように生きていきたいと思います。

それから、このお話を読んでいて、意味の解らない言葉がたくさんあって、かなり国語辞典を引きました。勉強になりました。言葉の意味が分からないと話を正確に理解できないことを痛感しました。それにしても、鷗外の風景描写は素晴らしいと思いました。

残念ながら、意味のわからなかったところが二つあります。

人買い人が言った「女子どもは、佐渡へ渡って粟の鳥でも追わせられることじゃろう。」と見えなくなった母親が歌う「鳥も生あるものなれば、疾う疾う逃げよ遂わずとも」です。

一つ目の言葉が「粟を狙う鳥を追い払う仕事をさせる」の意味では、大人の仕事としては簡単すぎるし目が見えなくなることに繋がらないので、ほかに意味していることがあると思います。

歌の方は、鳥は姉弟を指し、目的が達成できなくてもとにかくそこから早く逃げなさい。という意味でしょうか？

宮澤さん、読書会の皆さん教えてください。お願いします。

(おわり)

## 『山椒大夫』 感想文

すごく不思議なお話だなと思いました。

お地蔵様が額の火傷を治してくださったのはもちろん不思議な事ですがそれ以外で私が不思議というか分からなかった所は

- ① 女と子供だけの旅なのに用心棒的な男の人とかが一緒に居なかったこと
- ② 人買いが居るから旅人を泊めてはいけないという掟
- ③ 姥竹はどうして一人で海に飛び込んだのか？ 薄情な感じがしました。
- ④ 安寿は守本尊の地蔵さまを持っていながら自分達を助けてほしいと願わなかった(夢で見て、やっと額の火傷を治してもらった)
- ⑤ 安寿は厨子王と一緒にみてもらった草刈りに行くために髪の毛を短く切ったのなら、二人で逃げようと思わなかったのか？
- ⑥ 母親はどうして目が見えなくなったのか？

と、良くわからないことが多かったです。

印象に残った場面は、

『山椒大夫一家の討手が此坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾った。それは安寿の履であった』

という所が悲しかったし、安寿が人知れず、亡くなってしまったというのが伝わってきました。

『大きくなってからではなくては、遠い旅ができないというのはあたりまえの事よ。わたし達はその出来ない事がしたいのだわ。』と言った所も、まだ子供だけど弟を守らなくてはいけないという姉の強さが感じられたというのもあるし、何故か良くわからないけど印象に残りました。

今回、初めて読んで長くないお話しですが私にはまだ良さが分からないと思いました。

この本の良さが分かるようになるくらい読書を続けられればと思いました。

(おわり)

## 山椒大夫 森鷗外 感想文

「山椒大夫」に描かれている安寿と厨子王は、幼い子どもながら天命に抗うことなく逞しく「道」を生きる。安寿は孝行を貫くため、自らの命を犠牲にする。姉の信念をいしづえに奴婢の身から逃げおおせた厨子王が立身し、老いた母との再会を果たす最後は哀切だった。

厨子王は終の別れになると知らずに

「姉えさんの仰やる事は、まるで神様か仏様が仰やる事ようです」と己の気持ちの迷いは差し置いて真っ直ぐに姉の言葉を受け止める。

これが「道」なのではないだろうか。その後も、神や仏の為すがままに進む徳ある厨子王は、さまざまな心美しい人間に助けられる。

悪い慣習を払い、悪い人間を出さず、普遍的な人の道義を問いながら天道のあり方を導く結末。勧善懲悪の道徳にはしなかったところに意図が見える。

大正4年の発表。いにしへの民話を、鷗外は日本人の道義心を元に再構築した。鷗外は、軍医として国へ仕えながら文人としての苦悩があったはず。

明治の精神の崩壊と日本の近代化とのギャップを憂い、文学の中で日本人の徳義を問い直していると感じた。

道義や徳義に基づく日本人のところがぐらぐらと揺らいでいた時代だったのか。それは今も同じだと思うけれど。

鷗外が文人を集め、たびたび句会を開いたという根津の観潮楼を訪ねた気持ちで、安寿のころを歌に詠んでみました。

雀遂う（すずめ おう）

啾啄の邂逅（そったくのかいこう）

垂乳根の（たらちねの）

寄す処に散りぬる（よすがにちりぬる）

紅葉葉の色（もみじばのいろ）

頬に紅がさし、赫々と目を輝かせて散った安寿の命は尊い。その精神は高みに昇華されている。

弟のために命を犠牲にできるだろうか、我が家の祖先が望むならそれも良しと思えるくらい大人になった。自分でも不思議だ。

（おわり）

## 『山椒大夫』 読書感想文

潮汲女、山岡大夫、船頭はみんなグルだと思いました。掟の証拠は看板だけ。潮汲女の桶は空っぽだし「主従四人を見渡した」とあり、女子供しかいないと確認したようにみえました。

大夫は、宿に誘う時「強いて誘うでもなく、独語のように言った」と、消極的に見せたり宿賃を貰わず財布を預かると言いだし大胆だったり、気の弱い人の心理をよく理解しています。母親は大夫を言うがままになる程信じてはいませんが、大夫の詞に人を押し付ける強みがあり、どこか恐ろしい処があって抗えず、掟を破ってまで親切にしてくれた負目もあり、自分のところがはっきりわからないまま船に乗ってしまいます。心細かったり、頼るものが他になかったりすると、気の弱い私もよくこんな心理状態になってしまいます。

山椒大夫の長男は父親に反発して家を出ます、次男の二郎は奴婢が少しでも良い環境で過ごせるよう分け隔てなく立ち回ります、三男は父親の腰巾着です。安寿はこの次男の二郎の顔に善良さを見て望みをかけます。物に憑かれたように、聡く賢くなった安寿。地蔵尊の不思議な力と安寿の厨子王へ思いやる気持ちと幸運とで、厨子王はやがて国守になります。

山椒大夫一家が富栄えるという事は、従業員も栄えるという事になり、よかったと思えました。山椒大夫はただ損をしたくないだけで、もともとただの人でなしではなかったと思います。正月休みもあります。そういう時代なんだと思いました。

母との再会、正道は臍が煮え返るような怒りを歯を食いしばってこらえ、縛られた縄が解けます。こらえる事ができた厨子王は、失ったもの以上に得ることができ、この時ようやく安寿に報いることができたんだと思いました。

(おわり)

## 『為すべきこと』

『その晩恐ろしい夢を見たときから、安寿の様子がひどく変って来た。顔には引き締まったような表情があって、眉の根には皺が寄り、目ははるかに遠いところを見つめている』

額に十字の烙印を押される夢を見た次の日から安寿が変わってしまった。なぜ安寿は変わってしまったのだろうか？読んでいる間、その疑問がずっと頭から離れなかった。

安寿が厨子王を脱出させることに心を定めたのは15歳だった。自分のこれからの見通しを考えられるようになる年齢と捉えていいのだろうか。額に十字の烙印を押される共通した夢を安寿と厨子王は見たが、年齢と姉弟の差異もあってか、二人の進むべき道はここから分かれた。山椒太夫の領地から脱出し、厨子王は国を治める要人となり、社会に為すべきことを執り行う役割を担う人となった。

一方、佐渡の地で盲目になりながらも、生きながらえていた母は、我が子を見知らぬ人に委ねたことへの禍根から逃れられなかったに違いないが、しかしその苦しみから解放される事を選ばなかった。母には、その後の二人がどうなったかを知らなければならない、自分に課した使命があった。

母、娘、息子がそれぞれの使命を自分で心に定めて全うしていく姿に、私は、使命や役割を持って生きていけることがこれほど幸せなことであるのか、と感じた。

安寿は、もはや奴隷でしか生きられない日々自分が為すべきことは何なのか、葛藤したのだと思う。姉として、厨子王を逃すことが自分の定めであると確信したからか、ある日安寿が二度目の変化をし、今度は『蒼ざめた顔に紅がさして、目がかがやいて』いた。安寿は自分が生き延びることは最初から眼中になかったように読み取れる。自分が為すべきことの心が定まった安寿はますます目が輝く。厨子王を山の麓まで見送って、安寿は自分の使命を全うした。額に十字の烙印を押された夢を見た次の日から安寿が変わってしまったのは、安寿の開眼の瞬間だったのだろう。

やさしさも、悲しみも、全部ふくめて三人が辿った軌跡に、人が生きていくことの偉大さを感じずにはいられなかった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『 神仏の化身のごとし 』

平安末期、父探しの旅の親子は、不運から人買いによって離散させられる。その後、悲惨な運命に翻弄されるが、私はこの家族を包むあたたかい視線を感じないわけにはいかなかった。

人買いによって、母親と別れた姉弟は過酷な労働に身を置く。苛烈な領主の息子のひとりに二郎がいた。二郎は、奴と婢に別れるところを、うまく父親を言いくるめて、姉弟と一緒に置いた。父母を恋しがる姉弟に、咎めることなく「大きゅうなる日を待てばよい。」と声をかける。しかし、三郎に逃亡の議を聞かれると烙印をすると脅される。三郎は、長男にさえも烙印をおした山椒大夫の血を濃くひいているのだ。そんな中、二郎の密やかな導きは偶然とは思えない。

安寿はやがて、厨子王を逃がす決心をするが、ここでも二郎の導きがあった。姉弟と一緒に入山することに、またしても三郎は安寿の髪を切れと茶々を入れる。三郎もどこまでも変わらない。

安寿の犠牲を経て、厨子王は曇猛律師に救われる。確かに、直接的な恩人はこの曇猛律師であるが、私は二郎の導きなしには成しえなかったと思う。安寿の入山の願いの際、物も言わずに安寿の様子をじっと見ていた二郎は、こうなることをすべて見抜いていたのだろう。二郎というより、母親に託された地蔵尊が姿を変えて、姉弟を見守っていたのかもしれない。

深い家族愛と信仰を持つ一家には、過酷な運命に見舞われても、神仏の見えない慈愛があるように感じる。旅の目的は左遷された父親に会いに行くことで、人買いに出会ったのも子供たちを休ませる為であったし、厨子王が逃げられたのも姉の弟を思う犠牲があったからだ。

その後も、地蔵尊がきっかけで師実に出会い、厨子王は国守になる。ここで、山椒大夫に復讐をせずに人買いを禁じたただけであった。そのおかげで、山椒大夫の家はより栄える。納得はいかないが、元の話では復讐がされているらしい。しかし、鴟外はより栄えさせることで、二度と人買いをさせないという方法をとったのではないか。厨子王には益々の神仏の慈愛が注がれるだろう。

高齢で盲目になった母は、「安寿恋しや、厨子王恋しや」と子供たちを思う歌のおかげで、厨子王と再会が叶った。別れた子供たちを守るために、地蔵尊に自らの目を託したのかもしれない。それは神仏の眼差しというより、母の愛だった。再会という満願の際、再び厨子王をしっかりと見つめることができたと思いたい。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



## パチンコパーラー 『SANSHO』

父親が事業に失敗して失踪したあと、母と安寿姉さんと、僕（ずしお）と3人は、福島から新潟の上越まで夜逃げしてきた。姉さんと私は、金融業者の山岡さん車に乗せられ、舞鶴へ。母は、友人を頼って、直江津港からフェリーで佐渡に渡った。私たちは、舞鶴市にたどり着き、山岡さんの紹介で、パチンコパーラー『SANSHO』に住み込みで働き、父の残した借金を払うことになった。総額 2350 万円。安寿姉さんはコーヒーレディ、僕は、ホールスタッフになった。仕事は、キツかった。さらに、社長の息子、三郎専務のパワハラは凶暴そのもの。姉さんも僕も、ブチキレた三郎から、額にタバコで根性焼きを入れられる夢をシンクロしたほどのバイオレンスだ。そんなこんなで三年働き、七割方返済。ある日の夜、姉さんが急に大人びて、きれいになったのに気づいた。買物に行こうと誘われ、一緒に寮から外出すると、ドンキの駐車場に、最近、店を出禁になったパチプロがいた。「この人、二郎さん。パチプロやめてお店やるの。あたしと結婚する。街を出て自由になる。それにあたしは、もう、安寿じゃない。アンジェリーナ・ジャスミン……」それから、「これがあんたを守ってくれるはず。ほら、地藏尊のここに、あの時の夢の根性焼きの痕…」と姉さんは、僕の手の本尊を握らせて、涙ぐんだ。

さよなら、安寿姉さん、じゃなくて、A・ジャスミン。

とりあえず、母さんに会おう。僕も荷物をまとめて、寮を飛び出し、電車を乗り継ぎ、フェリーで佐渡へ渡った。

足を棒にして、佐渡中を訪ねて回った。

夜更けの街を歩き、たまたま見つけた看板。カラオケスナック『姥竹』

さびれた店のドアを開けた。歌が流れてくる。

安寿恋しや、ほうやれほ。

厨子王恋しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾う疾う逃げよ、逐わずとも。

母が、カウンターの中でマイクを握り、歌っていた。

姥竹さんはボックス席で失踪したはずの父に水割りを作っている。

「ずしお」という叫びが母の口から出た。二人はぴったり抱き合った。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)